Bulletin of Jumonji University, vol.48-2, 2017

研究ノート

# 日本語能力の伸びと停滞
## ―本学留学生の事例をもとに―

# Changes in Language Acquisition :
## Based on Japanese Test Scores for International Students

小笠原　典子
Noriko OGASAWARA

### 要旨

学習の上達程度を示す学習曲線においては、顕著な伸びが認められる期間ばかりでなく、上達スピードの低下期、学習の効果がみられない停滞期が存在する。本学留学生の日本語習熟度はどのように変化しているか、習得した学習は定着しているか、本稿では小笠原（2016）「能力別日本語教育の効果―留学生別科日本語教育を事例に―」において今後の課題とした「日本語学習の定着」に関し、本学留学生の事例をもとに日本語の習熟度を観察し、考察を加える。分析には現在学内で実施している共通日本語テスト「日本語ちからだめし」の結果を用い、留学生別科在籍時から学部入学以降の留学生の日本語習熟度推移を観察し、学習効果の上昇、停滞、下降の要因を考察する。さらに、学習効果を上げるためにとるべき方策に関して検討を加えたい。

### 1．はじめに

学習の伸びと停滞は知識学習、技術学習など様々な分野で言及されている。[1)] 留学生の日本語力の伸びとレベル別学習の効果については本学紀要47において、①初級から上級までのどの段階のクラスにおいても、半期間の学習効果は見られたこと、一方、②中・上級クラスにおいては、当該クラスで学習する重点項目に比べ、一段階下の初級・初中級レベルの学習効果が顕著にみられない場合があると述べた。

本稿では留学生別科を卒業後、本学に進学した学部留学生の日本語力の伸びに関して、留学生別科における１年間（学部入学前）から学部編入学初年度まで、日本語習熟度の推移を観察し、日本語力の上昇、停滞、下降の要因を探る。

十文字学園女子大学人間生活学部 語学教育セクター
Center for Language Education
キーワード：留学生の日本語、項目別日本語試験、日本語力の伸びと停滞、定着度

## 2．研究方法

### （1）方法

日本語共通試験「日本語ちからだめし」の結果を用い、日本語習熟度の推移を観察する。

本学では留学生の日本語習熟度を測るため、留学生別科留学生および学部留学生を対象に日本語共通テスト「日本語ちからだめし」を実施している。このテスト結果により自らの日本語力を知ることができ、同時に日本語力の伸びを数値で確認できる。また、試験結果を通し、教員から学生への学習に関するフィードバックを行っている。

「日本語ちからだめし」の概要は表１に示すとおりである。

表１　「日本語ちからだめし」概要

| | 留学生別科 | 人間生活学部 |
|---|---|---|
| 実施時期 | 前・後期　各学期末 | 前・後期　各学期初 |
| 対象[2] | 在学生全員 | １～３年生全員、４年生は希望者 |
| 出題範囲[3] | 旧日本語能力試験３級、２級程度[4] | 旧日本語能力試験２級・１級程度 |
| 出題内容[5] | 旧日本語能力試験過去問題に準ずる | 旧日本語能力試験過去問題に準ずる |
| 評価項目[6] | 漢字の読み・書き、語彙、読解、文法 | 漢字の読み・書き、語彙、読解、文法 |

分析には、留学生別科での試験と学部での試験に共通の出題範囲である旧日本語能力試験２級程度の成績を用いた。

表２に示すよう、旧日本語能力試験認定基準によれば、２級取得者は日本語を使って一般的なことがらについて、会話、読み書きができる能力を持っているとされている。２級取得者は、日常的なことがらであれば日本語だけで何とか対応ができるというレベルに達していると判定されるのである。

旧日本語能力試験２級の合否判定では、総合点で60％以上を得点したものが合格とされているが、２級段階の力が十分定着したと判断するには、80％以上の結果が求められると考える。試験合格のために語彙や文法の知識を暗記等の方法で短期間に獲得し、合格ラインをわずかに超えた程度で合格した場合、のちの継続的な学習がなければ習得したものは定着することなく、学力は下降していくと推測する。日本語能力試験１級合格者でもアンバランスな学習の伸び（小笠原2016）が認められることがあるが、それは会話、読み書きのレベルで２級段階の力が十分定着されていないためといえるであろう。

日本語能力試験２級段階の学習は、大学での専門学習を受ける基礎になるところであり、本稿では２級の成績を用い、習熟の度合いを観察し、分析を進めていく。

---

[1] 小笠原典子（2016）「レベル別クラスでの日本語学習の効果」十文字学園女子大学紀要第47集 pp.169-177

[2] 分析には留学生別科から学部に編入した学生のデータを用いた。

[3] 各試験は２つのパートに分かれ、３級、２級、１級の各レベルは個別に判定できる。本稿での分析には、留学生別科、学部に共通の出題範囲である、旧日本語能力試験２級の結果を用いる。

[4] 日本語能力試験は2010年より新しい形式で実施されている。旧日本語能力試験は2009年12月まで実施された。

[5] 旧日本語能力試験の過去問題の形式に準じて出題。

[6] 漢字読み・漢字書き問題は記述式。漢字問題を除きすべて４択問題である。

表２　旧日本語能力試験２級

| 構成 | 認定基準[7] |
|---|---|
| 文字・語彙<br>聴解<br>読解・文法 | やや高度な文法・漢字（1,000字程度）・語彙（6,000誤程度）を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きできる能力（日本語を600時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル） |

（２）分析対象

本稿では2015年度、2016年度、2017年度に本学に編入学した留学生を分析対象にした。分析は各年次入学の留学生の、留学生別科および学部で受験した試験結果に基づく。2015年度編入生であれば、2014年度前期・後期に留学生別科在籍中に受験した試験結果と、2015年度前期、後期に学部で受験した試験結果を用いる。

表３　「日本語ちからだめし」受験者と実施時期

| | |
|---|---|
| 受験者[8] | 学部３年編入生：2015年度入学生・2016年度入学生・2017年度入学生<br>留学生別科生：2014年度入学生・2015年度入学生・2016年度入学生（このうち2015年度、2016年度、2017年度に学部３年編入をした学生データのみ使用） |
| 実施時期 | 学部３年編入生：2015年度・2016年度・2017年度　各年度の前期４月・後期９月<br>留学生別科生：2014年度・2015年度・2016年度　各年度の前期７月・後期１月（このうち2015年度、2016年度、2017年度に学部３年編入をした学生データのみ使用） |
| 分析項目 | 漢字読み・漢字書き・語彙・読解・文法 |

表４　日本語ちからだめし　受験者数

| | 2015年度編入生 | 2016年度編入生 | 2017年度編入生 | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| 留学生別科前期 | 13人 | 11 | 19 | 43 |
| 留学生別科後期 | 11 | 13 | 18 | 42 |
| 学部前期 | 11 | 15 | 18 | 44 |
| 学部後期 | 10 | 12 | 18 | 40 |
| 合計 | 45 | 51 | 73 | 169 |

（３）分析項目

試験出題項目「漢字読み」「漢字書き」「語彙」「読解」「文法」の個別の成績と試験総合成績を分析項目とし、各項目の正答率と総合の正答率をデータとした。

[7]「平成20年度日本語能力試験問題と正解１・２級」p113試験の構成及び認定基準による。
[8] 試験未受験者、および本学編入生以外はデータに含めない。

## ３．結果

### （１）実施時期別による結果の推移　―　留学生別科前期・後期

表５は留学生別科在籍中の成績、表６は学部編入後の成績を入学年度別に表したものである。表７は日本語能力試験2008年度２級（国内受験）[9]の結果を示すものである。実際の旧日本語能力試験では、漢字の読み、漢字の書き、語彙をまとめて「語彙」とし、文法と読解も区別なく「読解文法」として評価された。総合60点以上で合格となる。

さて、「日本語ちからだめし」は、留学生別科前期（７月）→留学生別科後期（１月）→学部前期（４月）→学部後期（９月）と４回実施される。留学生別科では、各学期末に実施され、学部では学期の初めに実施される。学部前期の試験は留学生別科修了後、約２か月の春期休暇ののちに実施され、学部後期の試験は約２か月の夏期休暇ののちに実施される。

まず入学年度別に試験結果を観察する。表５、表６の平均点等の結果、図１の得点分布をみると、入学年度により総合得点の平均に差があり、また、得点分布にも広がりがあることがわかる。特に留学生別科前期の結果に大きく差が表れている。これは留学生別科前期[10]に在籍する学生に日本語力の差が生じているためであると考える。

留学生別科における進度には二つのパターンがある。留学生別科前期で初中級段階からスタートする場合と、中級以上からスタートする場合である。クラスは日本語レベルに応じて初級から中上級までと４段階設置されている。初中級クラスには２級段階の学習を始める学生が所属し、中級以上のクラスにはすでに２級程度の学習経験がある学生が所属する。したがって前期共通試験で２級程度の試験結果に広がりが出るのは予想されることである。また、入学年度別の得点の開きは、年度により在籍者の日本語力にばらつきがあることが一因と考える。

留学生別科後期の結果を見ると、得点分布も上方に寄り、総合点も前期より上昇し、学習成果は認められる。留学生別科後期になると、学部に進学希望するほとんどの学生は中級後期（２級程度の学習に加え、１級段階の学習を始める）から上級のクラス（１級段階に到達することを目標とする）に配置されるため、平均正答率は上昇している。

では、日本語力の上昇は学部入学後も継続されているのであろうか。次に日本語力の推移を別科、学部を通して観察する。

表５　留学生別科における平均点など

| | | 前期 | | | | | | 後期 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 漢字読み | 漢字書き | 語彙 | 読解 | 文法 | 総合評価 | 漢字読み | 漢字書き | 語彙 | 読解 | 文法 | 総合評価 |
| 2015年度入学生 | 平均 | 70.0 | 68.5 | 76.5 | 88.2 | 79.0 | 79.9 | 86.4 | 81.8 | 85.6 | 72.7 | 76.9 | 78.6 |
| | SD | 18.8 | 17.5 | 14.0 | 14.0 | 14.0 | 10.6 | 7.7 | 11.1 | 11.0 | 8.7 | 8.0 | 5.0 |
| | 最高点 | 100.0 | 100.0 | 94.1 | 100.0 | 96.2 | 91.4 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 88.9 | 92.3 | 88.1 |
| | 最低点 | 30.0 | 40.0 | 47.1 | 55.6 | 50.0 | 57.6 | 70.0 | 70.0 | 76.5 | 55.6 | 65.4 | 69.5 |
| 2016年度入学生 | 平均 | 56.4 | 54.5 | 42.4 | 51.8 | 55.0 | 50.9 | 71.5 | 68.5 | 62.0 | 69.2 | 64.5 | 66.2 |
| | SD | 16.3 | 21.1 | 16.3 | 16.0 | 19.5 | 11.2 | 21.2 | 13.4 | 14.7 | 13.8 | 12.5 | 11.0 |
| | 最高点 | 80.0 | 90.0 | 72.2 | 70.0 | 80.0 | 71.9 | 100.0 | 100.0 | 82.4 | 90.0 | 88.5 | 87.2 |
| | 最低点 | 20.0 | 20.0 | 16.7 | 20.0 | 20.0 | 37.7 | 40.0 | 50.0 | 41.2 | 50.0 | 50.0 | 53.2 |
| 2017年度入学生 | 平均 | 63.2 | 51.1 | 64.4 | 71.3 | 67.4 | 66.5 | 81.1 | 70.0 | 77.1 | 65.4 | 69.7 | 70.9 |
| | SD | 23.3 | 31.3 | 13.1 | 21.4 | 22.1 | 16.7 | 13.7 | 24.5 | 11.2 | 12.0 | 17.3 | 10.5 |
| | 最高点 | 100.0 | 100.0 | 94.1 | 100.0 | 96.2 | 92.7 | 100.0 | 100.0 | 94.1 | 88.9 | 92.3 | 85.4 |
| | 最低点 | 20.0 | 10.0 | 41.2 | 22.2 | 19.2 | 27.2 | 60.0 | 20.0 | 52.9 | 44.4 | 42.3 | 51.0 |
| 全体 | 平均 | 63.5 | 57.2 | 62.4 | 71.4 | 67.7 | 66.6 | 79.5 | 72.6 | 74.6 | 68.5 | 70.0 | 71.4 |
| | SD | 20.8 | 26.0 | 19.1 | 22.5 | 21.0 | 17.4 | 18.0 | 20.7 | 17.5 | 14.4 | 16.6 | 13.7 |

表６　学部における平均点など

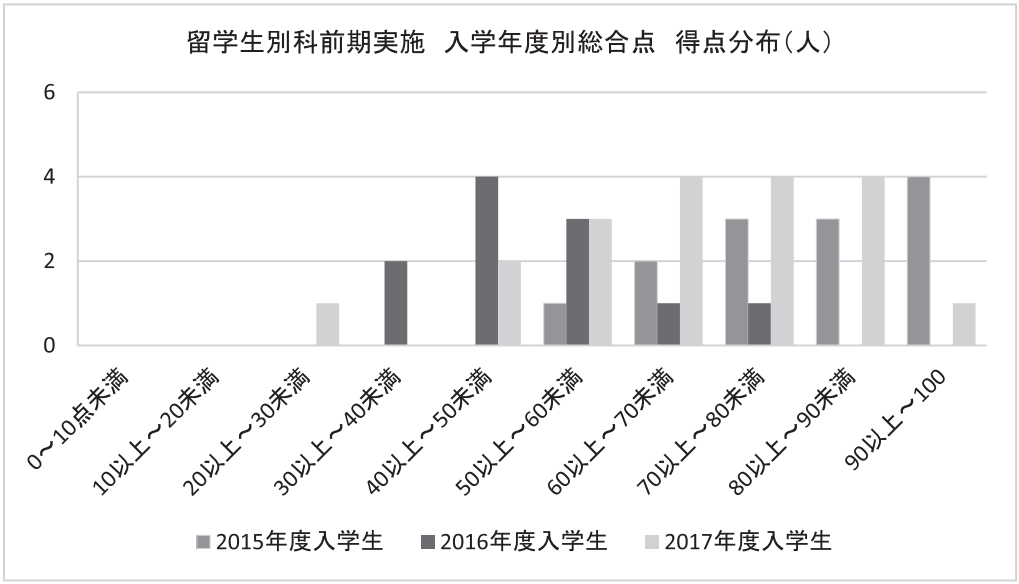
| | | 前期 | | | | | | 後期 | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 漢字読み | 漢字書き | 語彙 | 読解 | 文法 | 総合評価 | 漢字読み | 漢字書き | 語彙 | 読解 | 文法 | 総合評価 |
| 2015年度入学生 | 平均 | 78.2 | 54.5 | 66.7 | 67.3 | 67.5 | 67.1 | 74.0 | 70.0 | 77.5 | 77.0 | 67.9 | 74.4 |
| | SD | 16.6 | 33.6 | 15.4 | 13.5 | 20.0 | 12.3 | 25.0 | 30.2 | 11.1 | 17.7 | 29.0 | 16.3 |
| | 最高点 | 100.0 | 100.0 | 83.3 | 90.0 | 92.9 | 82.1 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 88.9 | 84.6 | 88.1 |
| | 最低点 | 40.0 | 0.0 | 33.3 | 40.0 | 14.3 | 39.3 | 20.0 | 20.0 | 47.1 | 22.2 | 42.3 | 39.1 |
| 2016年度入学生 | 平均 | 68.0 | 61.3 | 63.3 | 72.8 | 62.5 | 67.7 | 65.9 | 65.6 | 66.3 | 66.8 | 65.8 | 66.4 |
| | SD | 22.4 | 34.2 | 21.2 | 15.6 | 18.1 | 16.1 | 28.9 | 23.1 | 16.5 | 25.4 | 23.1 | 19.3 |
| | 最高点 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 87.5 | 91.4 | 80.0 | 100.0 | 93.8 | 100.0 | 93.8 | 92.7 |
| | 最低点 | 40.0 | 20.0 | 25.0 | 38.5 | 37.5 | 43.9 | 0.0 | 20.0 | 43.8 | 20.0 | 18.8 | 39.5 |
| 2017年度入学生 | 平均 | 75.6 | 53.3 | 57.3 | 67.1 | 61.9 | 63.4 | 58.3 | 61.7 | 73.1 | 58.3 | 66.3 | 63.5 |
| | SD | 22.3 | 21.7 | 18.6 | 15.8 | 20.9 | 15.1 | 23.8 | 22.3 | 13.3 | 19.8 | 21.6 | 14.6 |
| | 最高点 | 100.0 | 80.0 | 87.5 | 91.7 | 85.7 | 89.2 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 80.0 | 92.9 | 87.1 |
| | 最低点 | 40.0 | 0.0 | 18.8 | 33.3 | 21.4 | 33.1 | 20.0 | 40.0 | 46.2 | 20.0 | 28.6 | 39.5 |
| 全体 | 平均 | 73.6 | 56.4 | 61.7 | 69.1 | 63.5 | 65.8 | 62.3 | 61.3 | 71.6 | 62.0 | 63.2 | 64.4 |
| | SD | 21.0 | 29.0 | 18.8 | 15.1 | 19.5 | 14.6 | 26.0 | 24.8 | 14.4 | 22.4 | 24.1 | 17.3 |

表７　旧日本語能力試験2008年度２級における平均値など

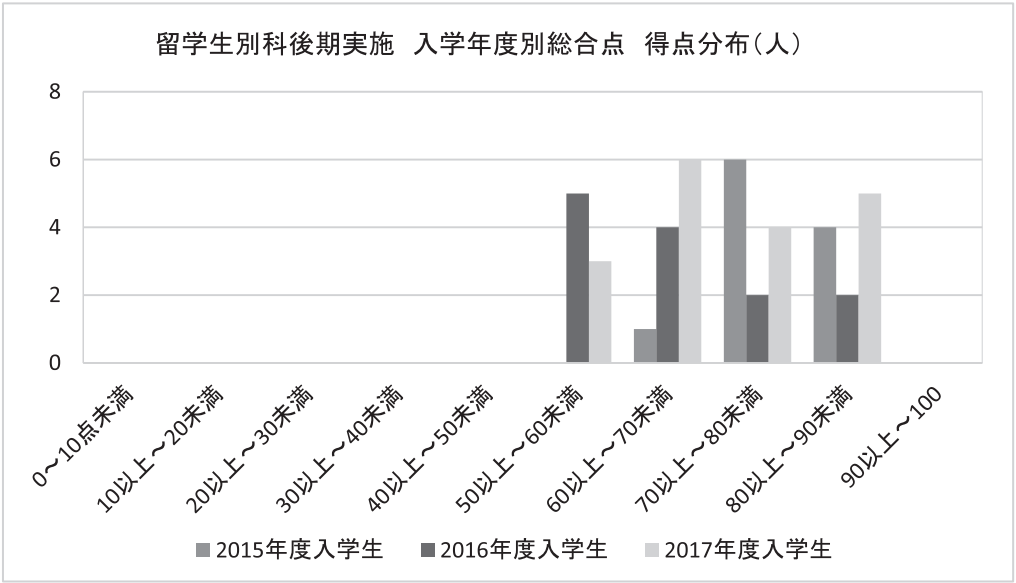
| | 文字<br>語彙 | 読解<br>文法 | 聴解 | 総合 |
|---|---|---|---|---|
| 平均 | 63.0 | 53.1 | 59.2 | 53.1 |
| SD | 15.1 | 36.2 | 17.8 | 36.2 |
| 最高点 | 100.0 | 100.0 | 100.0 | 100.0 |
| 最低点 | 0.0 | 0.0 | 0.0 | 0.0 |

図１　入学年度別　総合点得点分布

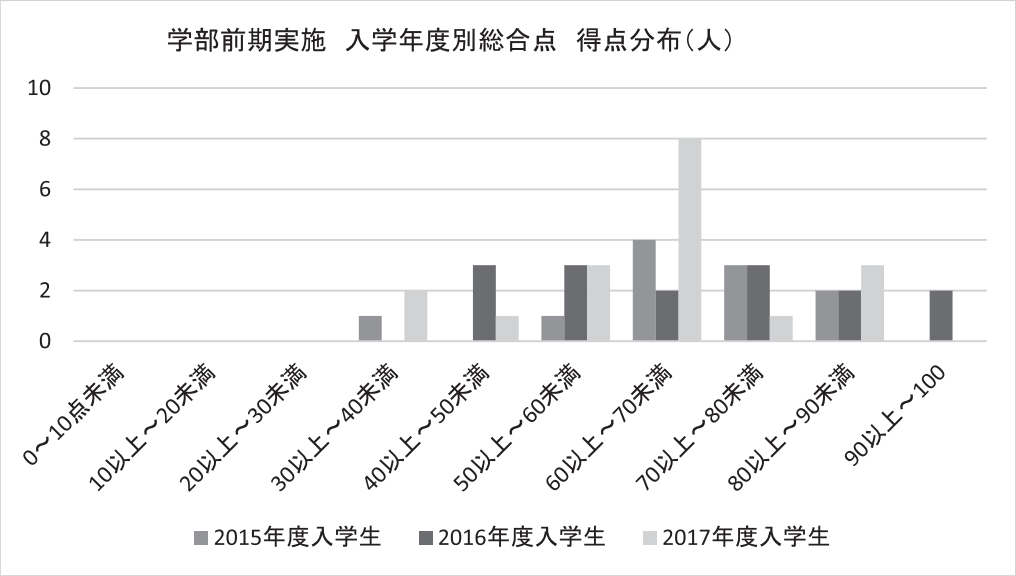
①留学生別科前期実施



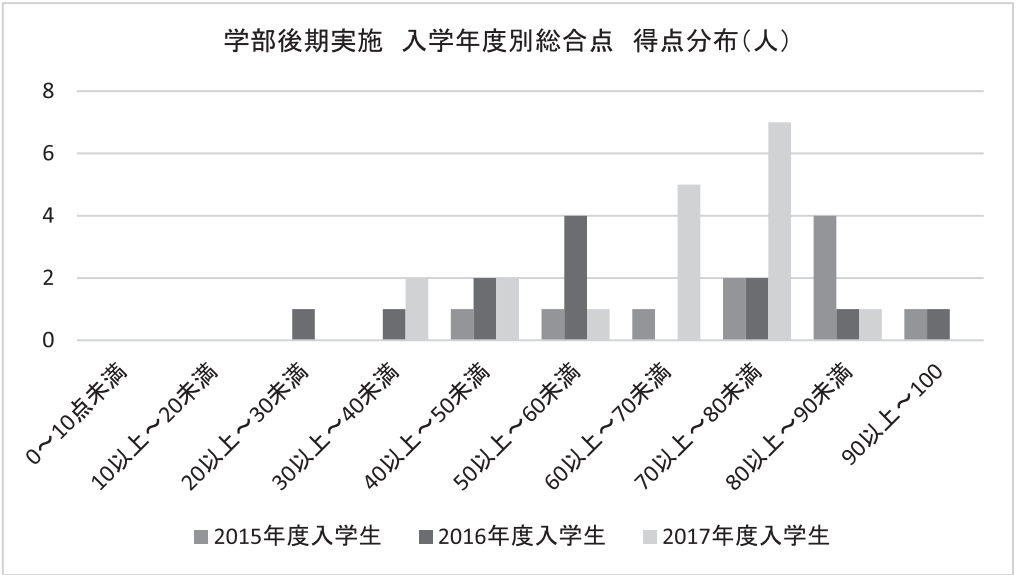

②留学生別科後期実施



③学部前期実施



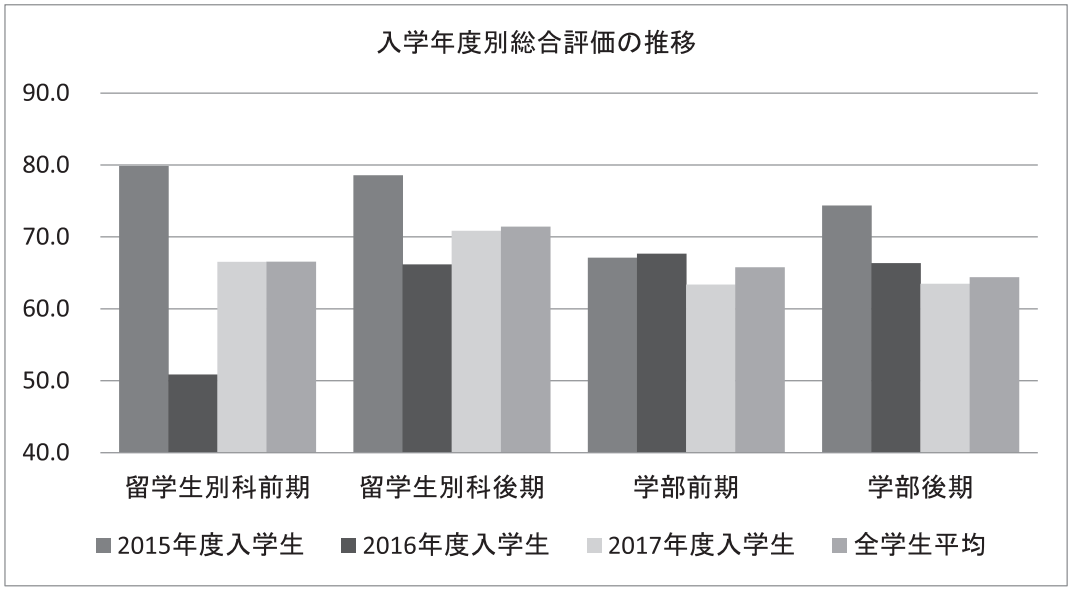

④学部後期実施

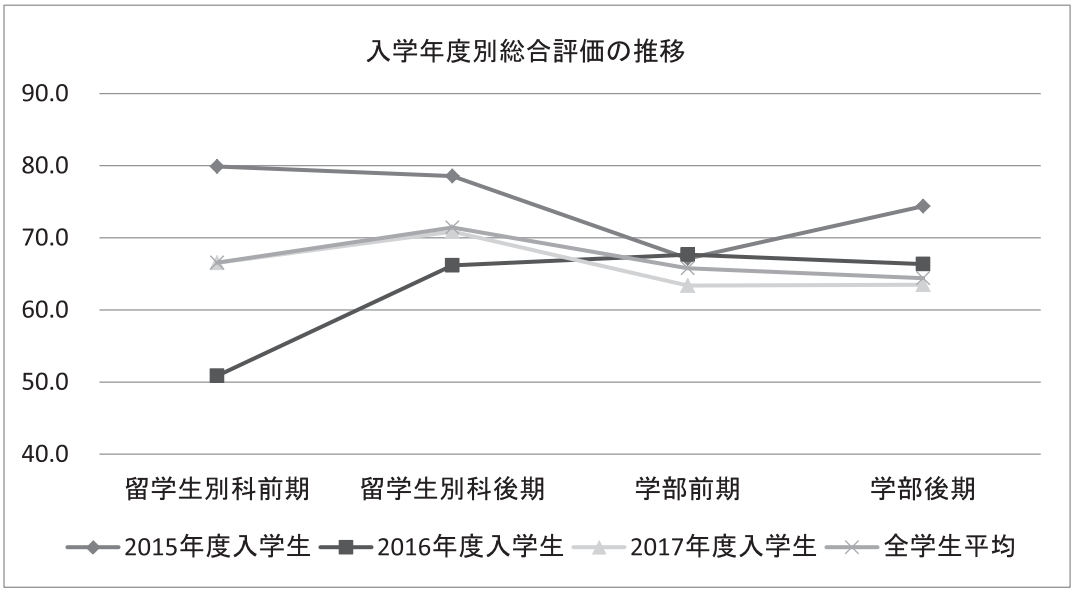



（２）実施時期別結果の推移　―　留学生別科前期から学部後期まで

留学生別科前期から学部後期までの入学年度別の総合得点の平均値の推移を示したのが図２である。

図２　入学年度別に見た日本語力の推移




留学生別科前期（７月）から留学生別科後期（翌年１月）までの成績推移をみると、2015年度入学生ではほぼ横ばいであることが観察されるが、2016年度入学生には明らかな得点上昇があり、2017年度入学生においても上昇がみられる。これに対して、留学生別科後期（１月）から学部前期（同年４月）の成績の推移をみると、2016年度入学生ではわずかな上昇がみられるが、2015年度入学生、2017年度入学生には下降が認められる。学部入学後は、2015年度入学生ではわずかな上昇がみられるが、2016年度入学生、2017年度入学生ではわずかに下降している。

留学生別科前期から後期にかけては、先に述べたように前期で中級前期の学習を始める学生もいれば、すでに中・上級の学習に入る学生もいるが、どちらも後期で一段上の学習に取り組む。そのため、進学を目指し、学習を継続していれば、成績の上昇はあると言える。2015年度入学生は変化がなく推移しているが、総合得点を見ると前期で平均79.9点、後期で78.6点を獲得している。得点分布をみると、最高点がやや下降しているが、最低点は上昇していることがわかる。80％以上の得点を獲得していた学生は、すでに日本語能力試験２級レベルの内容を獲得し定着させていたと考えると、下位得点分布に属する学生の、半期間での学習の成果が数値に現れた結果だといえるだろう。

留学生別科後期から学部前期にかけては、2016年度入学生にはわずかな上昇がある一方、他の年度では下降が認められる。この推移は二つの試験実施の間に春期休暇があることが一つの理由ではないだろうか。度数分布をみると、下位得点者の分布増加がどの年度の入学生においても観察される。学習項目がまだ定着していない下位得点者は学習の継続がなければ日本語力が低下すると推測できるのではないか。

学部前期から学部後期にかけては、入学年度の４月、後期初めの９月に試験を実施しており、二つの試験の間に１学期の授業と夏期休暇を挟む。日本語力が十分定着していない場合でも、学習を中断しなければ力は維持できるであろうが、結果はそれを示していない。得点分布をみても下方への広がりが観察され、特に下位成績者にこの傾向があったのではないかと推察する。また、学習量も特に下位分布に属するものに影響していたのではないかと考える。

本稿では成績グループ別の成績分布、成績の推移を分析は行わなかったので、定着度が低い者ほど学習効果が維持できていないと結論できないが、得点分布の下方への広がりからみて、学習時間や学習の質が結果に影響を与えているのではないかと考える。

### （３）試験項目別の成績の推移

試験項目「漢字読み」「漢字書き」「語彙」「読解」「文法」「総合評価」には学習効果に差がみられるだろうか。項目別にみた全学生の成績の推移を示したものが図３、入学年度別に各項目の得点推移を表したものが図４である。なお、「漢字読み」、「漢字書き」は選択肢問題ではなく、記述問題であり正確さが求められる。

#### 別科前期から別科後期

「漢字読み」「漢字書き」「語彙」では別科前期から後期にかけての伸びが大きく、「文法」にも伸びがみられる。これらの項目の伸びは、在籍クラスの学習成果によるものであろう。このことは図４の入学年度別の項目別評価の推移からも確認できる。「読解」では下降を示すが、得点でみれば大きな差はない。入学年度別の最高点、最低点から考えると、もともと受験者の日本語力にばらつきが大きかったか、あるいは読解問題に難易の差があったとも考えられる。

#### 別科後期から学部前期

別科後期から学部前期をみると、「読解」を除いてどの項目についても下降が見られ、特に「漢字書き」「語彙」ではその傾向が著しい。試験の間隔は３か月であるが、その間は長期休暇で、授業形態の学習は行われていない。下降が大きい項目では、もともと短期間の知識として習得された内容が、その後、継続学習による強化を行わなかったため、定着がなかったのではないかと考える。

#### 学部前期から学部後期

学部前期から学部後期をみると、「漢字書き」、「語彙」、「文法」では上昇がみられるものの、「漢字読み」、「読解」では下降している。学部前期から後期にかけてはどの項目とも前期15週間の学習の後、夏

期休暇をはさんで試験が実施されたことが下降の原因であり、さらに学部入学後の継続学習による強化がなかったことも一因として挙げられるだろう。上昇を示す「漢字書き」「語彙」においても、1年前の留学生別科後期の結果からみると大きく成績を落として下降している。確実に学習を習得している割合が高ければ、結果は上昇を示すか、横ばいを示すはずである。

図3　項目別成績の推移（全学生平均）

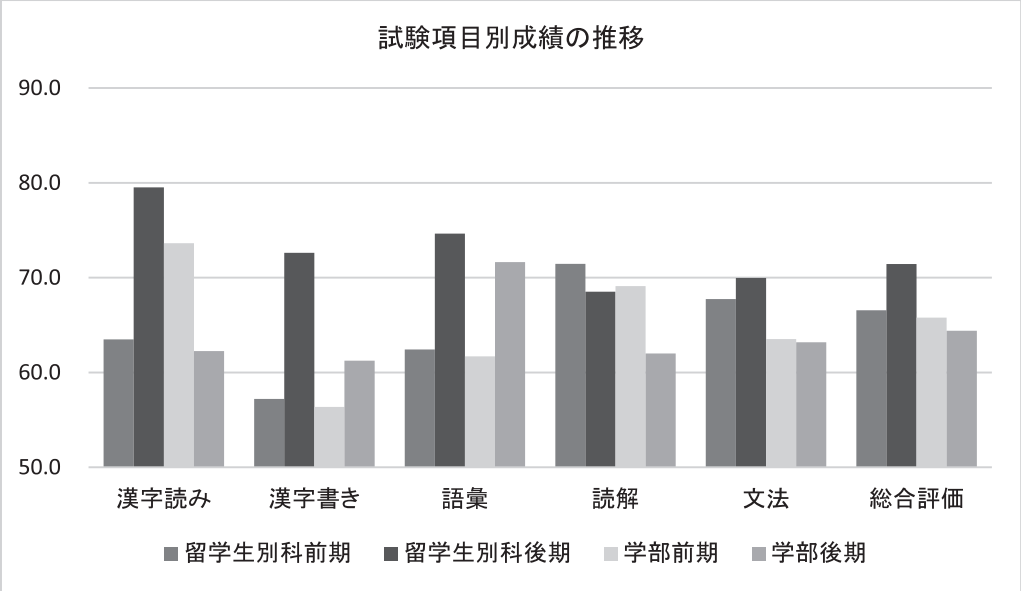
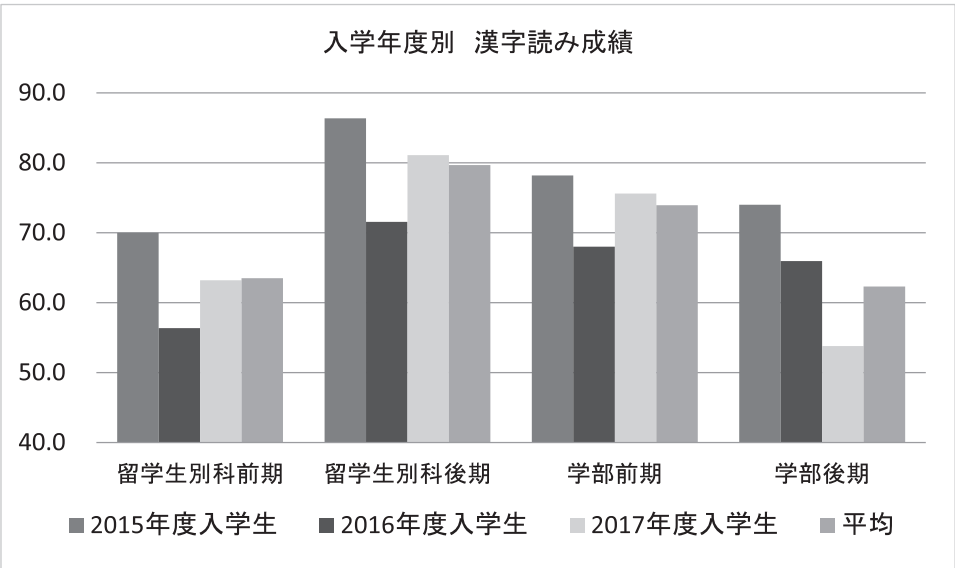
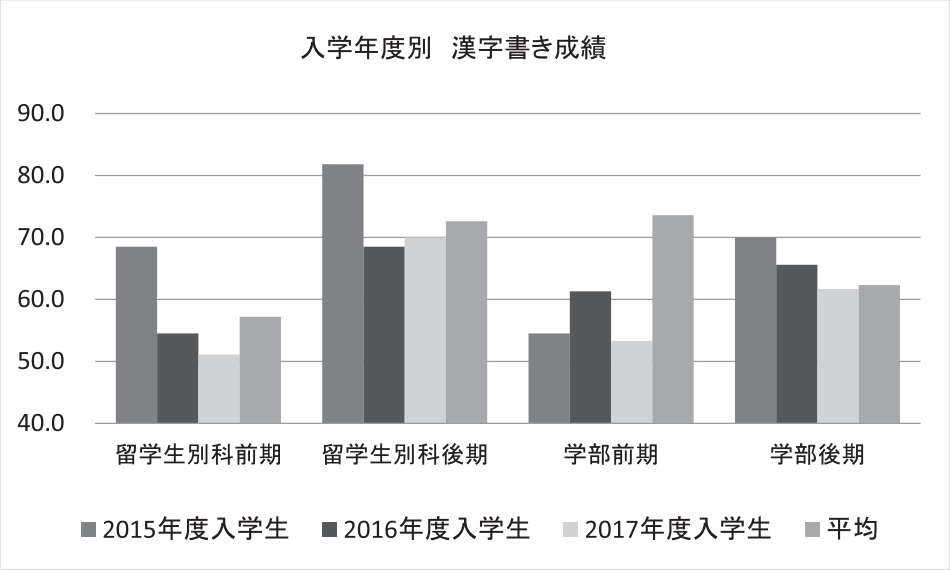



図4　入学年度別にみる項目別成績の推移

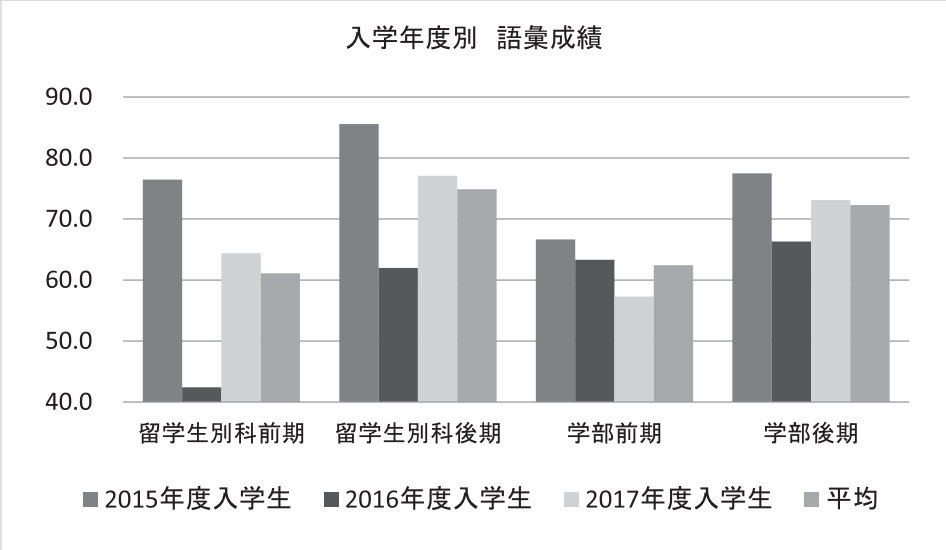
①漢字読み



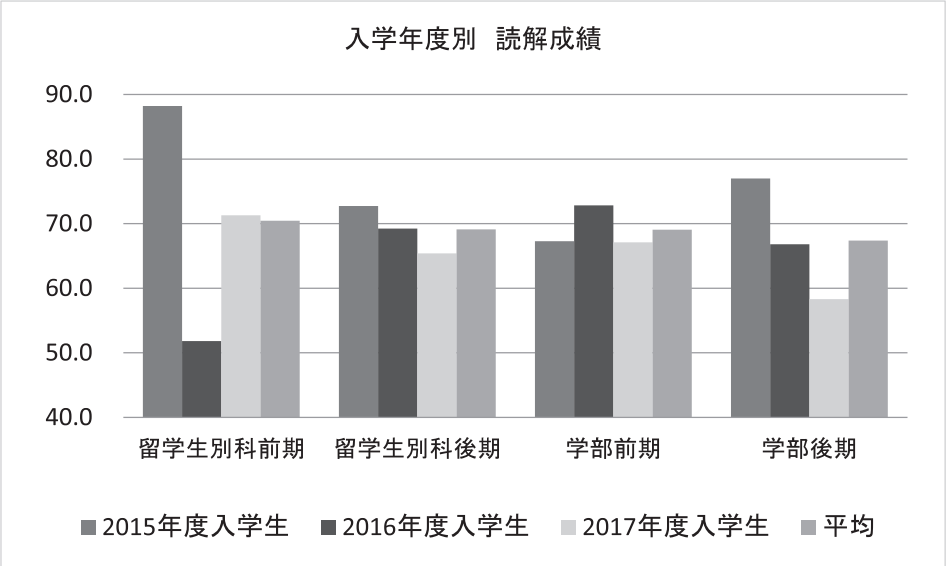
②漢字書き


入学年度別　漢字書き成績
90.0
80.0
70.0
60.0
50.0
40.0
留学生別科前期
留学生別科後期
学部前期
学部後期
2015年度入学生
2016年度入学生
2017年度入学生
平均

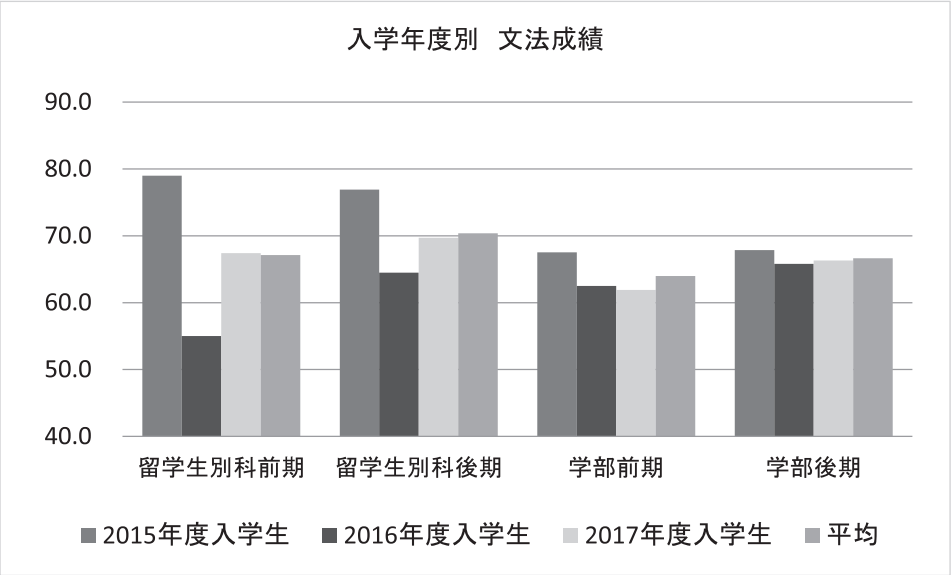
③語彙


入学年度別　語彙成績
90.0
80.0
70.0
60.0
50.0
40.0
留学生別科前期
留学生別科後期
学部前期
学部後期
2015年度入学生
2016年度入学生
2017年度入学生
平均

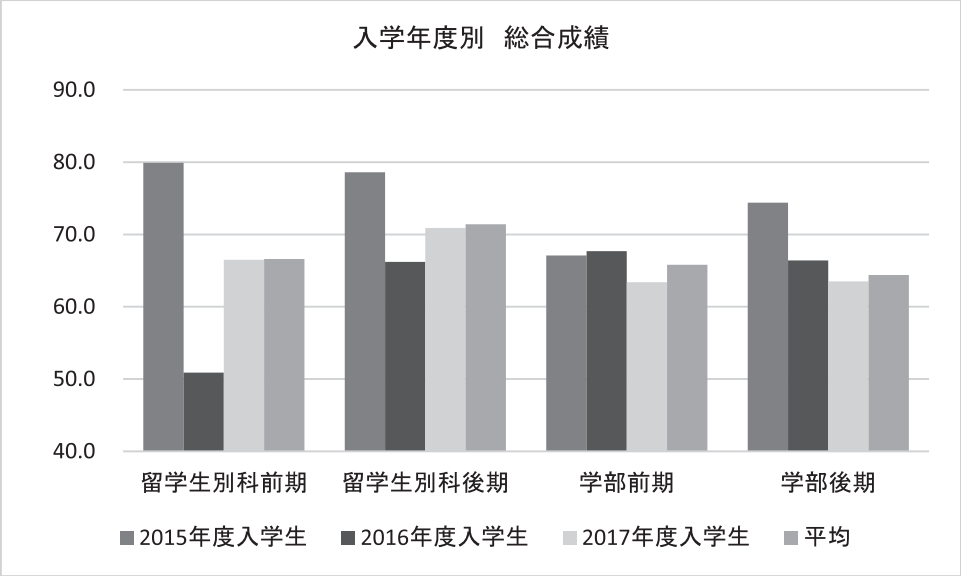
④読解


入学年度別　読解成績
90.0
80.0
70.0
60.0
50.0
40.0
留学生別科前期
留学生別科後期
学部前期
学部後期
2015年度入学生
2016年度入学生
2017年度入学生
平均

⑤文法


入学年度別　文法成績
90.0
80.0
70.0
60.0
50.0
40.0
留学生別科前期
留学生別科後期
学部前期
学部後期
2015年度入学生
2016年度入学生
2017年度入学生
平均

⑥総合成績




## ４．まとめと今後の課題

### （１）学習習熟度の推移

本学留学生の日本語習熟度について観察してきたが、留学生別科前期から後期に向けて習熟度は上昇を示し、学部入学後は習熟度が下降することが確認された。その理由として第一に挙げられるのが試験実施の時期である。すなわち、一定時間の学習を経てその直後に実施した試験結果の上昇は、学習した効果がそのまま結果に表れたためと言える。これに対し、学部入学後の伸びははっきり認められず、それは休暇明け直後の実施であったことを一つの理由とした。また、留学生別科在籍時に比べ結果が下降しているという傾向は、日本語力がまだ十分に定着していない者に見られるのではないかと予測した。

### （２）学習時間に起因

学習時間のみを比較すると、留学生別科ではいわゆる四技能を伸ばす総合日本語の科目は週10コマ開講される。一方、学部では、総合日本語系の科目は週１コマである。授業における学習量を時間で比較すれば10：１である。留学生別科での伸びの一因はこの授業形式の学習時間によるものとも言える。授業形式の学習だけが語学学習ではないが、授業時間が10分の１に減少することは、どのレベルの学習者にとっても学習習熟度の下降に影響を与えている。力の向上のために学部進学後の学習形態を再考するべきであろう。

### （３）学習の定着度に起因

中級以上の学習内容が確実に身についていれば、学習時間による下降の度合いはそれほど大きくないと考える。しかし、特に学習途上である者にとって、日本語力の向上には授業形式で日本語学習を継続

することが必須である。本稿で見た日本語力の下降、停滞の原因はここにあると考える。上達の途中にある学生にはできるだけ多く、日本語に特化して学ぶことが大切であると述べたい。

しかし、本稿では、学力別の習熟度の推移分析を行っておらず、学習時間、レベル、習熟度の間にどのような関連があるか確認できていない。下位グループによる習熟度の推移と、上位グループの習熟度推移を比較することが今後の課題となる。

### （4）学習時間以外の要因

語学力を向上させるには、日本語授業、専門の学習、自学習だけにとどまらない。学習の向上には学習動機づけ、学習への意欲、学習方法、生活状況、環境への適応なども影響する。本稿ではこれらの要素と学習習熟度の関連については分析を行っていない。今後の課題として、こうした項目を調査、観察し、留学生の日本語力向上のための方策を探りたい。また、力を伸ばす潜在力を持っているにもかかわらず、伸びが停滞している学生に対し、限られた時間で提供できる内容を開発し、学生への適切なフィードバック法を構築することも今後の課題としたい。

### 参考文献

財団法人国際教育支援協会、独立行政法人国際交流基金,（2009）「平成20年度日本語能力試験試験問題と正解１・２級」

小笠原典子（2016）「レベル別クラスでの日本語学習の効果―半期学習後にどのような伸びがみられるか―」、『十文字学園女子大学紀要47』2016、pp. 169-177、十文字学園女子大学

林伸一（2008）「外国人留学生の日本社会への適応パターンと日本語教育の課題」、『大学教育５』2008、pp. 109-119、山口大学教育機構